

京都光華女子大学カウンセリングセンター ご案内

当センターでは、さまざまなこころの不安・悩み、心理・発達的問題について、ご相談に応じます。なお、ご相談の内容について秘密は厳守されます。

申し込み方法 *必ず事前にお電話にてお申し込みください。(完全予約制)

電話番号 : 075-325-5281

受付時間：月～土（祝祭日除く）午前10時～午後5時

開室時間：月～金：午前10時～午後7時／土：午前10時～午後5時（祝祭日除く）

料金 : (初回) 3,000 円

(2回目以降) 個人面接2,000円／親子並行面接3,000円

面接時間：1回50分

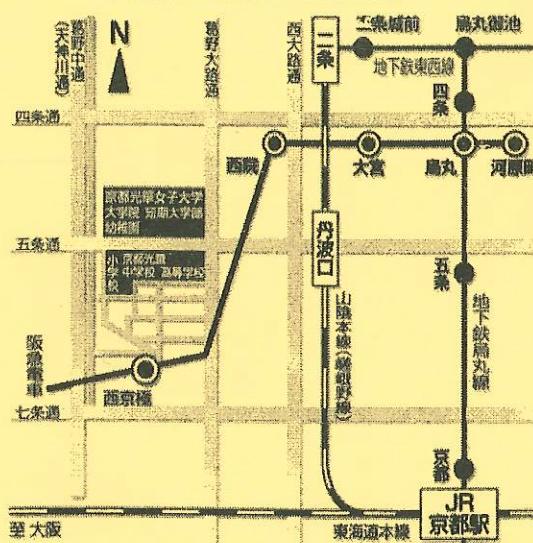
面接担当者：大学院生（臨床心理コース専攻）、研究生（本大学院修了生）

専任カウンセラー、本学教員

*その他、詳細はお電話にてお問い合わせいただくか、下記HPをご覧下さい。

URL : <http://www.koka.ac.jp/facilities/counseling.html>

地図・交通機関ご案内



光華*こころの手帳 編 者 徳田仁子（大場・白田・中尾・鍋島・横内・米田）

—第15号—

発行者 カウンセリングセンター長 長田 陽一

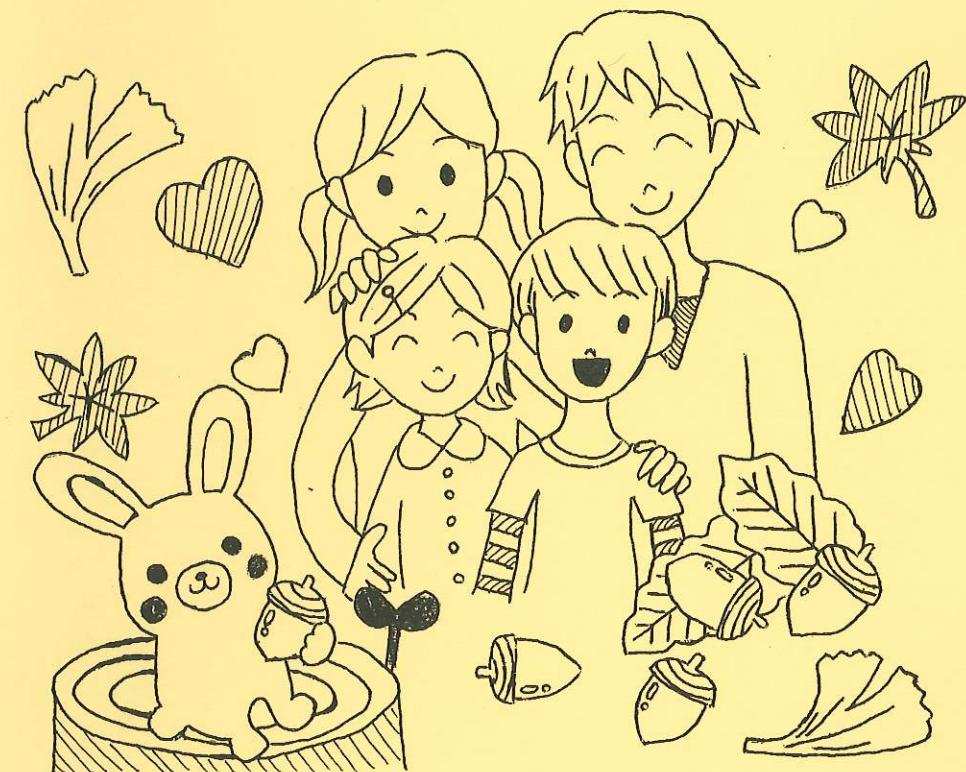
発行所 京都光華女子大学カウンセリングセンター

〒615-0882 京都市右京区西京極葛野町 38

こどもと女性のための相談室

光華 * こころの手帳

第15号



京都光華女子大学

カウンセリングセンター

平成25年10月発行

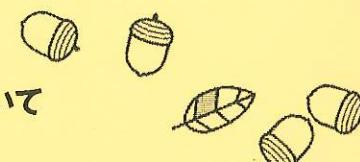


秋の夜長、虫の音が心地よい季節となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。おかげさまで「こころの手帳」も第15号を発行することができました。今年の夏は記録的な暑さが続きましたが、そんな夏の暑さもようやく和らぎ、秋らしくなってきたと思う今日この頃です。それと同時に、夏の疲れやだるさを感じたり、なんとなくしんみりしたり、物思いにふけてみたり…そんな季節もあります。

当カウンセリングセンターでは、心にたまたま疲れを少しでも和らげ、気持ちが軽くなるようなお手伝いができればと思っています。どうぞお気軽にご相談ください。



「縁(えん)」について



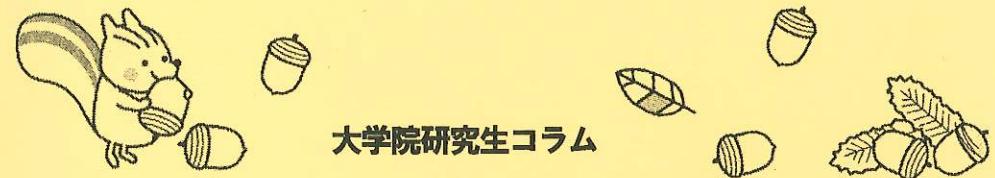
今西徹（本学准教授・臨床心理士）

「縁(えん)」ということについて、最近よく考えるようにになりました。今自分がここでこうしているのは、数限りない、目に見えないつながりも含めての縁に導かれてのことだと思うと非常に不思議な気持ちになります。そうしてみると、そもそも「私」とは何なのか。この身体が「私」であって、これは目に見える、確かな「私」だ、とも考えられますが、生き物の身体を構成する分子は、もとをたどればその生き物が食べた物の分子であるそうです。これが私の身体だと思うけれども、その私の身体を作っているのは、以前は無数の別の生き物たちの身体を構成していた要素の集まりであるわけです。この要素の集まりたち、分子たちは無限の時間を経て今の場所にいるわけで、はるか以前にはどんな物の一部だったのだろう、などと考えると、本当に不思議な気持ちになります。

といったようなことは、先人たちが考えたり発見したりしたことをもとに、私が勝手に考えて勝手に不思議な気持ちになっているわけですが、実はカウンセリングというのはこの「不思議な気持ち」を、頭の先ではなく、本当の意味で体験する場であるのかもしれないと思います。当たり前と思っていた物事の背後に思いがけない「縁」を発見し、自分という存在がとてつもなく大きな流れの一部であり、生かされている存在であることを深く納得する。これは宗教的な体験とも

いえると思いますが、こうしたことを本当の意味で体験するためには、ただ考えるだけでは届かないという気がします。逆説的ですが、理不尽な状況にあって本当に苦しんだり、悩んだりすることを経た後に、そうした体験があるように思います。カウンセリングは究極のところは、そういうところを目指しているのではないかと考えるようになりました。

カウンセリングという場が成立すること自体、不思議な「縁」の働きを感じます。京都光華女子大学カウンセリングセンターが、そのような「縁」を大切にできる場であればよい、そのような場にしていくために一心に精進していきたいと考えております。



大学院研究生コラム

以前にクラシックのコンサートに行った。その日は、私が好きな曲が演奏されることもあり何日も前から待ち遠しく、当日の演奏中にはこの時間がずっと続いているといながら、幸せな一時を過ごした。今では映画にも使われ広く親しまれているその曲だが、意外なことに作曲者が発表した当時は、違ったらしい。曲を献上された演奏家からは「難しすぎて演奏できない」言われ、後の初演時の評判もそれほど芳しいものではなかったらしい。いつから今のように親しまれるようになったのかはわからないが、もし当時の評判のままで終わっていれば、その曲を聴く機会もなく、私がその日の幸せな一時を味わうこともなかつたのだろう、と思った。

歴史的な“大発見”とされる出来事にも、その当時には理解されなかつた、というエピソードを聞くことがある。かなり規模は違うが、ふと私は自分が生きている日常世界とそのようなエピソードとを重ねて考えがある。もしかすると、今、日々の中で無駄だと思つたり、不快でしかないと感じていることも、それだけではないかもしれない。少し角度を変えて考えれば、また違つるものに見えるかもしれない、と考える時がある。(H)

